

初盆のお参り

故人の遺志受け継ぎ闘おう

八月十二日、闘いながら、初盆を迎えた遺族の角徳次さん、CO患者の佐藤信義さん、坂井武義さんの御仏前に、原告団として線香とろうそくをお供えし、故人のめい福を祈りました。

初盆まいりには遺族会から溝口さん、永江さん。CO家族より石原さん、塚本さん、小川さんの五名が参加。角さん、佐藤さん、坂井さんの遺族を激励するとともに、裁判闘争の経過を報告し、故人の遺志を引きついで、原告の一員としてさらに闘いを強めることを誓い合いました。

また、兵庫に転居された故橋本三郎さん宅には、別に御仏前を送りました。



三池大爆発犠牲者遺族の苦しい労働は、アソニットと三池縫製という誘致工場でスタートした。写真は、アソニットの職場で働く遺族。それから17年。企業は見違えるばかりに規模を拡大したが……。

一遺族の手記

アソニットを創った人達の中には、自分から扇風機を持ってきて仕事をしている人さえあるほどです。足がやけて、だるくてどうしようもなく、足の裏にサランパスを……

リポビタン飲みながら 苦しい仕事の毎日です

ここは熱いアソニットの職場

私達、三池大爆発犠牲者遺族の生活対策のために、荒尾に誘致されたアソニットに定年制が出来、三十八名の遺族の人達が職場を去って行かれてから、早くも二年になるとうとういます。その後も、去年二名、今年六名と退職者が続き、アソニットに働く遺族は少くなるばかりです。

職場も、二年前までは、まわって来るニット製品にアイロンをかけるのは別の部屋でしたのに、今はみんな同じ所に移ってきたので、熱くてたまりません。クーラーは入っているのですが、涼しいのは通路だけくらいで、場所によっては三十四度くらいになり、熱いアイロンがそばにありながら窓は締めきり。

息苦しくて、頭はボーンとなり倒れそうになります。だからみんなは、レモンと酢を混ぜたのを冷やして持ってきたり、リポビタンを飲んで仕事をしている人。

はって仕事をする人。汗が流れてしょうがないので、ハンカチを水に濡らし、それを首にまいて仕事をしている人。

座つては、どんなにでもお父さんさへ生きていてくれたら、あの事故さえなかったら、こんなに苦しい目にあわなくてもよかったのに、無理な商売をさせられたり、あんな苦しい所で仕事しなくて済んだのに、と改めて十八年前のことを思い出しています。

定年まであとわずか。今後は苦しい思いの毎日でしょうが、裁判勝利の日まで石にかじりついて頑張ります。

全国のCO守る会会員の皆さんにお願い

全国のCO患者守る会の会員皆さん。どうか本ページへ、皆さんの自身の思いや意見、あるいは経験や考えなどをこしこしお寄せください。

本紙を通じて交流し、学び合い、連帯を結び、そして確信をもって前進しましょう。働く者の命は、自分たちで守るべき道はないのですから。

編集部

福岡スモンの活動に学ぼう

福岡スモンの会(福岡市中央区赤坂一丁目二〇)は、その後も重要な問題になっていきます。和解に際するかどうかは別にして、和解のもつ危険な側面に対して十分な対策をたてながら、会側の判断を許さず、裁判闘争をすすめていくことにしています。

そのために、学習会を各地で開き、支援共闘会議を中心に、裁判の早期・公正判決を求める署名、カンパ活動にとりくんでいます。

また、佐々木博子さんが書かれた山野の遺族の軌跡を追った「男たちの遺書」の普及活動など、この裁判勝利のための運動を大きくするためにとらんでいます。

(パンフレット)がそれで、これはスモン訴訟弁護団との共同編集だが、すでに四十号に達した。

「スモン便り」が紹介した取り組み表によれば、環境問題公害対策、被害者年対策福岡県連絡会議、北陸スモン決起集会参加など、活動はきわめて多彩。福岡県スモンの会の活動には学びたいものが多い。



福岡スモンの会が発行し続けている機関誌「スモン便り」。中身はズシリと重い。

まさに殺し屋と同じだ

許せぬスモンの製薬会社

先日、彼らが製薬会社に談判に向いたスモン患者、際、シャッターを閉ざし、門前私の方々の話を聞いてもらって対応したという。は、健康で、何んが、本末、こうしたことは、賠償金ない生活に、を支払えば済むことではないので、慣れ、それ、あつて、被害者の健康を回復させる、併せてそれまでの苦痛に報わねばならないのである。

だが、それは当面無理だし、すでに亡くなった方もいる。だから生活に困らないだけのお金と、その他必要な処置で、被害者側が我慢してあげよう、といっているの。この問題である。国も、製薬会社も、そのことがまるでわかっていないのである。

水俣病等の……

製薬会社も営利企業だから、もうけたいというの当たり前のこと。キノホルムの有害性も、それはあたかも小説を読むように、別世界の出来ごととして受けとめることが多いように思われる。実際に目の前に、目が見えなくて、主人に支えられながら歩き、涙ながらに語られる被害者の方。「下半身がしびれる」「足がねじれたように感じる」、このコメント。これらの現実を迎えたと、果たして平気でいられる者があろうか。いるはずがないと信じたいのだが、いるというのだ。

製薬会社。被害者の方によると

国際障害者年を 実りあるものに

国際障害者年対策福岡県連絡会議は、六月七日福岡労働者福祉センターで、国連決議学習会を開催した。障害者団体七団体と、労働団体から四団体の代表が参加。①国際障害者年が、国連で決まるまでの国連、及び民間団体の努力の積み重ねの歴史の経過。②国連は一九八一年を「国際障害者年」と決め、「全面参加と平等」をテーマにし、目的とした「障害者の社会への身体的、及び精神的適合を援助すること」、など学習し、大きく運動の輪を広げ、この運動を果しあるものにする努力を誓い合った。(別項の手記は、右の運動の一つ、スモン患者の呼びかけに、一人の男子学生がこたえたもの)